
ライバルは超能力者？

過労死志願 （大バサミではなく、阿良々木暦撰・文房具最凶の瞬間接着剤が武器です。）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルは超能力者？

【Nコード】

N1584T

【作者名】

過労死志願 （大バサミではなく、阿良々木暦撰・文房具最凶の瞬間接着剤が武器です。）

【あらすじ】

そこは、とある、魔法が発達した世界。
この世にある不可思議なことはすべては魔法で説明されるこの世界だが、そんな世界にも彼らは存在する。

科学の産物にして終着点。速効にして高出力。しかし、汎用性には大いにかけるその力の名前は……………超能力。

この物語は、魔法が発達した世界とある大魔法使いとライバルになった一人の少年の物語である。

プロローグ？

そこはとある古い城。

吸血鬼が住むといわれるその城の中で一人の少年が書物を読みふけていた。

その髪は漆器のように漆黒の光沢をもち、右目には黒い傷が走っている。某忍者漫画の先生のような傷だが少年の場合はあの人のように壮絶な理由はない。ちよつと父親が作った刀の試し切りに巻き込まれてしまっただけである。

髪は腰に届くほど長く、それを肩あたりで白い布で縛っている。傍らには二メートル近い刀が置かれており鞘には《銀閃》と彫刻刀で雑にほられている。

「いつまでここに居座るつもりだ？」

少し疲れたのか、少年が目を抑えなが大きくを伸びをしたとき、ドアが開く音とともにやたらとスタイルのいい金髪の美女が書庫の中に入ってきた。

黒い露出の激しいドレスを着こみ、長い金髪を揺らめかせながら歩くその姿はまるで女神のように美しい。しかし、口元から除く牙が彼女が魔性のものだということを激しく主張していた。

『仕方がないでしょう。調べものには時間がかかるのです』

「やめろ…………お前の英語は整いすぎていて気持ち悪い。そんな言

葉を聞くくらいなら日本語で話したほうがまだ」

「ほな、初めから俺にあわせてくれや……………ここに来るために英語覚えんの大変やってんで。八仙のやつがめっちゃスパルタやつてん」

英語の時とは違うひどくなまった日本語で少年はダレツと机の上に倒れこむ。

「それで、いつまでここに居座る気だ人間。正直さつさと出て行つてほしいんだが」

「賭けにまけたくせにえらい態度でかいやないか吸血姫。お前に一撃入れたら好きなだけここの書庫を調べてもええ約束やる？」

「それは……………そうだが……………」

若干無然としつつそう答える美女に、少年はプツと笑いを漏らす。

「なんだ？いきなり笑い出して。気持ち悪いぞ」

「い、いや……………マジでそのかつこでその仕草はにあわへんなあと思つて」

額に青筋を浮かべながらも、笑いが収まらない少年を見てこのままでは話にならないと悟ったのか、美女は指をふるい自分にかけていた幻術を解く。

そこには少年の腰あたりまでしか身長がない小柄な少女。これが

彼女の真の姿のようだ。

「ガキが無理して大人ぶるからそういうことになんねんハゲ」

「ハゲてないだろ！？大体私はもう三百年近く生きているんだぞ！
！ガキではないわ！！」

「おうおう。長生き自慢かいな。これやから年寄りは……………」

「どうしろというのだ！？」

まあ、実際年寄りには違いない。少年は**いまだ百四年の年月しか生きていないのだ**。約3倍の年月を生きている存在が相手では、**多**少年より長生きなだけの少年からは年寄りといわれても仕方がないだろう。

「なあ、『超能力者』……………」

「なんや吸血姫？」

「お前はなんで魔法なんて調べているんだ？お前たちは『この世の**ことわり**理を数式でひも解く学問』の産物で、魔法の力は使えないの**だろ**う？」

その言葉に少年はピクリと反応した後、ニヤツと嫌な笑みを浮かべる。こいつがこの笑みを浮かべる時はたいてい**ろくなこと**はしないので少女は**少しだけ後ずさる**。

「な、なんだよ」

「吸血姫……………確かに超能力と魔法は相いれへんけど、さっきおまえが聞いたややこしい学問と魔法は相いれへんと……………ホンマにそう思うか？」

「その学問の名前は前が言ったんだろうが！……………あたりまえだ。話を聞いただけでわかる。お前の異能やその学問は魔法による奇跡を否定する。魔法による神秘を否定する。だからその学問と魔法は決して相入れることはできない」

「俺はそうはおもわへん」

少年はそういうと、再び書物に目を戻しそこに描かれた魔法回路を指差した。

「いずれ『その学問』……………便宜上科学って言わせてもらうけど……………と魔法は複合される。そして、魔法科学なんてふざけたものが生まれるやろ。俺はその草分けになりたいんや。おまけにこの世界の魔法と科学は非常に似通つとる点が多いからな。なんとかなるやろ」

「なんというか……………最終的にかなりいい加減なセリフで締めくくつたな」

少女のツツコミにはいつさい耳を貸さず、少年は本を読みふける。隣に置かれたノートには独自の解釈が描かれ無数の数式と、魔方陣がえがかれている。

それを横から覗き見た少女は目を見開きやがてそれを食い入るように見つめた。した。

そこには魔力がないものが様々な自然現象を使い、そのエネルギーを魔力の代替として魔法を発動させる方程式が刻み込まれていたのだ。

「おま……………どうやってこんなものを！！」

「ん？ああ、これは俺が考えたんちゃうんや。俺の相方君。ほら、さっきいうたやろ。火井八仙フォービグーションいうねんけどな、そういつが俺でも魔法が使えるように考えてくれたんやけど……………超能力者はどんだけ魔力が与えられても魔法は使えへんみたいでなあ、結局は失敗作の烙印押されてもうたんや……………。まあなんかの役に立つやろうと思って持ってきたんや。なんや、興味あんの？式は頭の中にはいつとるからあげんでそれ」

「い、いや……………ほしいわけではないが……………」

科学と魔法の複合……………。あながち不可能ではないかもしれない。

その数式は六百年生きてきた最強の魔法使いにそう思わせるだけの完成度があった。

「用がすんだんやったら、さつさと出て行ってくれや。こう見えて忙しいねんで？」

「……………魔法と科学の融合の前に、お前はまず家主への礼儀を覚える！！」

先ほどの驚きも忘れ、金髪の少女は少年を怒鳴りつけた。

ちなみに……………。

「ところで……………魔法は一般人に無用な混乱を起こさないように隠匿されているらしいが、ばらして大丈夫なのか？」

「え？」

この一言が、メガロメセンブリアに単騎で挑んだ『銀狂乱』をうむことを吸血姫は知らない……………。

キャラ説

名前：松壊シシン

超能力者：能力名……………強制終了
シャットダウン

自分の手が相手の体に接触している間、相手の体内にある《気》《魔力》《超能力》をかき乱し詠唱の途中だろうがなんであろうが不発に終わらせることができる。ただしすでに発動してしまった魔術の破壊はできないため、発動した魔法や能力に触れても壊すことはできない（たとえば、幻想殺しみたいに、発動された炎剣を殴りつけて破壊ということはできない）。ただし常時発動型（身体強化・呪い、障壁など……………）は例外。

自分の内側に働きかける《石化》《呪い》《魔法薬》などには完全な耐性があるが、外から動きを封じる《氷結》《束縛》などには完璧に無力。普通に捕まるし氷漬けにもなる。

しかし、精霊種、幽霊などといったものには圧倒的な破壊力を持ち、対象に触れた瞬間、彼らを構成している力を雲散霧消させ殺害することができる。ただし鬼や悪魔などにはきかない。あくまで実体がない者のみこの現象が起こる。この力は装備している武器などに延長させることはできるが、魔法の強制終了は延長させることができないため手で触れることでしか発動しない。

オン
オフ
使用不使用が可能なようで、普段は能力を切って使えなくしている。

能力強度としては中級なので、まだまだ伸びしろあり。

他の能力：体質的不老不死（魔力ではなく身体異常のため超能力との併用は可能）。再生時には傷口から銀色の煙が噴出しおさまると傷が治る。軽い切り傷擦り傷程度なら瞬時に治るが、四肢の切断、臓器の欠損などは三十秒弱の時間がかかる。基本的にどんなことをされても死なないが、痛覚はあるのでけがをすることをひどく嫌う。

・戦いの主な方法は剣術。居合抜き、抜刀術。

・歩法術と呼ばれる体術を覚えており、水面、空中を歩くことができると同時に、地面では光速で動けるが、これをする则全身がバラバラになる……というか跡形も残らず消滅してしまうので、一撃入れることが精いっぱい。その後二十四時間再生することはない。諸刃どころか完全な自爆攻撃。普段は人の動体視力が追い付かない速度で、自由自在に動くことができる『神行』をつかい敵を翻弄する。

・刀は父親が作った聖剣（笑）『銀閃』。魔法が使えない息子のために『切断力学』という未来の化学が使われており、雷だろつが鋼鉄だろつがなんでも切れる（当然再生は不可能）が、ひどく折れやすいため取り扱いには細心の注意が必要。折れてしまつても鞘に収めれば直るらしいが再生に必要な期間は半日。

もうちょっとどうにかならないかと、シシンは鞘の再生能力の解析をして改善を目指している。

スキルは話が進むごとに増えていく予定です。こつこ期待！

ブローグ？

ここは近畿地方、滋賀県。

江戸の時代には交通の要所として発展したこの県も、電車や車が
発展したこの時代ではただの寂れた田舎となり果てている。

そんな県に京都からの来訪者が一人のんびりとした足取りで降り
立った。

逆立った黒髪に長身の彼の身の丈ほどあるかとは思われる上等な
布に包まれた棒状の何か。眼鏡をかけた顔からは生真面目な印象を
受ける。

「エーシュン。こっちですよ」

その言葉と同時に男は眼鏡越しに、声を掛けてきた人物を見た。

ボーイッシュな金色の短髪に、絶対零度を思わせる冷たい青い瞳。
口には煙草をくすぶらせ真っ赤な唇から煙を吐き出している。そん
な真っ赤なスポーツカーに乗った美女に、男・青山詠春は苦笑を浮
かべた。

「タバコはやめろと言ったはずだぞ？」

「馬鹿ね。私の場合はこれが若さの秘訣なんじゃない。しつてた、
超能力者にとってタバコの煙に含まれるニコチンは細胞の老化を遅
らせる効果があるの」

「嘘ばかり言ってるんじゃない。この前シンさんが言ってたぞ。『いや、普通に体に悪いで』って」

「……………私は太く短い人生を送るのが目標なの。口出ししないで」

「さっきと言ってることが正反対だ」

「たたく、誰に似たんだか……………。若干のため息をつきながら詠春が車に乗るのを見届けると彼女も煙草を揉み消し車に乗り込む。どうやら車の中でしたばこを吸うのは嫌いなようだ。」

見た目に似合わず法定速度を順守しながら発進する車に感心しながら、詠春は前を見続ける美女に質問した。

「なぜここに来たんだ？別に迎えに来てくれなくてもよかったんだぞ。いったことがあるんだから道に迷うこともないし……………」

「それはあなただ私たちをまだ甘く見ている証拠ね。私たちの本拠地は常に一人の能力者の能力が覆っているわ。桃源郷ユートピアっていう能力なんだけどね。彼の能力が覆っている場所は彼の許可があるものしかたどり着くことができないわ。それ以外の人間は彼の能力範囲外を永遠にさ迷うことになるの。あなたたちの言う認識阻害の強化版ね」

「悪質な能力だな……………突破する方法はあるのか？」

「皆無ね。この能力は今まで誰にも破られたことはないし、もしあったとしてもいつ敵になるかわからないあなたたち魔法使いに教えたりはしないわ」

「手厳しいな。あと俺は魔法使いじゃないんだが……………」

「同じようなものでしょ？」

琵琶湖の湖畔に出た車は琵琶湖を横目に走りながら加速していく。どうやら速度制限がゆるくなったようだ。標識には60の文字が書かれている。

「それで、京都神鳴流の党首にして次期関西呪術協会の党首が私たちの党首に何の用なのかしら？あの人自身、かなりあつのめんどくさがっていたけど？」

「いや、お義父さんにつなぎをとってくれないかと頼まれてな。少々麻帆良に来てほしいそうだ」

「あの妖怪のパシリをしなければならいなんて、婿養子のいいなづけて大変ね詠春」

若干あきれを含んだ声とともに美女はハンドルを切った。

車が入った道は一応きちんと舗装されていたが、周りはうつそうと茂る竹林に囲まれており薄暗い印象を受ける。

「もうすぐ着くわよ。どうする？あそこから歩く？今ちょうど見ごろだけど」

「歩かせてもらう。あそこは本当に絶景だからな。あ、もしかしてさっき言っていた認識阻害の強化版に一役かっているのか、あれ」

「それはないわ。私たちの力は周りの環境に侵されることはないわ。すべては本人の力量次第。あなたたちの魔法みたいにドーピングができないから結構シビアな世界なのよ」

「そうか。まあ、いまは……………」

そして、突如竹林が終わりその代わりに無数の桜並木が現れた！！

満開の桜に感動を受けながら詠春はゆっくりと、とまった車から降りる。

「どうでもいいか」

「ようこそ。超能力者互助組織……………関西能力者協会へ」

同じように煙をくすぶらせながら車を降りた美女は、車になでるように触れた。

瞬間、そこにあつた車がまるで幻のようにかき消える！！

テレポーテーション
瞬間移動。それが彼女……………マリア・F・スコットが誇る能力の名前である。

満開の桜を十分に堪能した詠春たちがしばらく歩くと、そこに巨大な木製の門が現れた。《大百足神社》とかなり趣味の悪い名前に苦笑を浮かべながら詠春は門の使用人用の小さな扉をたたく。

その瞬間、ゾツとするような殺気を門の向こうから感じた詠春はあわててその場から飛び退く！！

15

しかし、

「あー!!」

「ああ……………また折れましたか……………」

伸びる途中だった刀身は詠春の受け流しを受けて門についてる部分からボツキリと折れてしまい、その場に何とも言えない沈黙が下りた。

「こんな刀でよく今まで身を守れたな」

「切れ味は半端ないのよ？シシンの流派は抜刀術だから切断以外の技はめったに使わないし……………」

フォローをーれるマリアも何とも言えない表情になりながら、刀身が飛び出た使用人用の門を押しあける。

そこには、ちょっとだけ切なそうな顔をした黒い長髪の少年が、折れてしまった刀身にため息をつきながら刀を鞘に納めているところだった。

「久しぶりに会っんやから詠春の度肝を抜いたろう思ったのに……………。やっぱ早急に再生術式組んだほうがええなあ……………科学と魔法の複合を使うなんて贅沢言ってんと、普通の魔法の式を刻んでもらったほうが早いんやろか？」

「あきらめンのはやー!!式の改善は昨日言いだしたばかりのことじゃないですか!!」

登場早々弱音を吐いたのはこの物語の主人公にして、この能力者協会の創始者。松壊シシンである。

もともとアルビノである彼だが、その髪は今は黒く染まっており、瞳は傷があるほうが茶色、ないほうが真紅というオッドアイ。肌は紙のように白い。病的と言っていいほどである。

しかし、そんな様子は一切見せないままシシンは鞘を見つめながら彫刻刀をふるいくつかの化学式を刻みこんでいく。吸血鬼の城で研究していたあの式である。

「本当に、この人四百年近く生きている怪物なんですかね？」

「言わないでよ。私だっていまだに半信半疑なんだから……………」

そんな彼の間抜けな姿にため息をつきつつ、詠春は片膝をつきつつ跪いた。

「ああ？何の真似や詠春くん」

「お義父さんからの伝言です……………麻帆良学園の学園祭で武道大会に出てほしいんです！！」

「はあ！？」

シシンの素っ頓狂な声が協会の中に響き渡った。

一話

松壊シシンは不老不死である。どうにも人外の血が混ざっているらしい彼の一族の特徴らしい。

それと同時に、彼は超能力者である。どう考えても相容れないであろうその力を持った彼は、だれがどう見ても最弱の不死者だった。

再生能力が異常といっても、瞬時に回復するわけではなく、痛覚も残っている。彼自身に宿った超能力も触った人物の特殊な力を一切使えなくするというしょぼいもの。

氷づけにされれば、氷が解けない限り一生氷漬けだし、捕縛の術式なんてものを使われたら逃げることはできない。いつぞやの魔女狩りなどに巻き込まれた時はかなり悲惨なことになってしまったらしい。一度殺された後再生して復活してしまったため、計七百三十八回の火刑にかけられてしまった。なんで発狂しなかったんだろうな？と笑いながら語る彼の姿には涙を誘われる。

しかし、彼を知る人物はこう語る。彼の实力を知る人間はことごとくこう語る。

『松壊シシンこそが、史上最強の不死者である』と……………。

…+…+…+…+…+…+…+…+…+…

「きさまがこんなところに来ているとは珍しいな。明日は槍が隕石が降ってくるだろう」

「いや、まあ最近関西にひきこもったからそういわれてもシャーないんやけど、俺ほんまは出不精ちゃうねんで？」

微妙に顔をひきつらせながら、シシンは駅で出迎えた瞬間に毒を吐いてきた親友と握手を交わす。

場所は麻帆良学園内部の駅。女子中等部エリアに最も近い駅で降りたシシンを出迎えたのは、真紅のスーツにメタルフレームのメガ

ネ。きらめきなんてものは感じられない氷のような瞳を持つ、能面のように表情を動かさない少年だった。

関東守護職。三千余年生きたといわれる神仙。現在最もタオイズム仙道を極めていると目される仙人。火井八仙の登場である。

「おまえこそ、久しぶりに会った思ったたらなんかさらに人間臭くなつてへん？仙人の最終目標は俗世を離れて自然に溶け込むことやろが。そんなんであえんかいな？」

「下らん。そんな馬鹿な目標を目指すぐらいなら、一円でも多くの金を稼いだほうが有意義な人生を送れると思わんか？私が神仙まで言ったのはあくまで不老不死になるためでありそんな最終目標は笑つて売り払つてやつたわ」

「……………あ、いや……………お前がそれでええんやつたらおれは別に何もいわへんけども」

よー神仙になれたな……………。

金銭欲にまみれまくった無表情の神仙を見て内心そんなことを考えていたシシンの顔が若干どころか、完璧に引きつっていたということとは言つまでもないだろう。

そんな感じで旧交を温めながら二人はのんびりと麻帆良の中を歩いていく。今は授業時間のため人の姿は少ないが、上品に整えられた西洋風の街並みを見ることは、最近行った都会といえれば大阪か京都しかないシシンにとっては十分な娯楽になった。

「それで、なんであのぬらりひょんは俺のことよんだんや？俺がメ

ガロメセンブリアと喧嘩してもうたからいまだに仲が悪いん忘れたんかいな？」

「そんな貴様らに対して頼まなければならないほど面倒なことが起きているんだよ。というか今回はそんな貴様だからこそ力を借りたい。詳しい事情は近右衛門が話すだろうが……………」

その時だ。麻帆良全体にお昼を告げるチャイムが鳴り、いつの間にかたどり着いていた女子中学校の校舎から無数の生徒たちが吐き出される。

「あ、バース先生こんにちは！！」

「こんなところに来るなんて珍しいですね？」

「あ、だれですか、その人！？外の人！！」

「学園長のお客人で馬鹿だ。あんまり近づくなよ。バカがうつるぞ」

「おい、くら……………」

八仙のあんまりな言い草にシシンの額に青筋が浮かぶ。しかし、少女たちはそんなことは一切気にせずシシンをもみくちゃにした後、笑いながら昼食を食べに行った。

「な、なかなかパワフルなねーちゃんたちやな……………」

「お前がねーちゃんというのは筋違いだと思うが……………」

見た目的にも実年齢的にもいろいろアウトな感じである。

とりあえずもみくちやにされ疲れ切つて倒れてしまったシシンを
パーシェン
 引きずり、八仙は学園長室の前に到着する。

そして、ドアを開けその中にシシンを放り込んだ。

「ふお！？し、シシン殿！―どうされたというのじゃ？」

中で近右衛門がしばらく慌てふためくのを聞きながら、フオー
 ーするのが面倒な八仙はそのまま外で待機。携帯を取り出し国際株式サ
 イトに接続。金の亡者は本日二回目の株式操作を行うのだった。

$$\vdots \quad + \quad \vdots \quad + \quad \vdots \quad + \quad \vdots$$

「ま、まあ紆余曲折あったが今回シシン殿を呼んだ理由をお話ししよう。シシン殿は魔法世界で戦争が起こりかけていることはご存知かな？」

「ああ、最近なんかわけわからん間に緊張状態になってもうたあれやろ？連合vs帝国！！このフリースだけ聞くとどつかのアニメ思っ出さへん？」

「お前はいちいち茶々を入れないと話を進めることができない体質なのか？」

いつものように、おちゃらけたセリフをまき散らすシシンに、株式操作を終え二億円ほどに利益を上げた八仙は絶対零度の視線を向ける。

シシンは肩をすくめて黙り込み、近右衛門はため息をつきながら、続けていいかの？と確認を取ってきた。

「わしらは麻帆良は表向きには旧世界の独立した魔法使い互助団体じゃ。しかし、連合の援助を受けている以上、実際のところ連合の

下部組織という色調が強い」

「ま、そうやるな。俺らもそれをしっとったからあんまりかわらんことにしたんや。メガロメセンブリアにはいろいろとカリがあるさかいなあ」

「それは十分に返したと思うのじゃが……………律儀な男よ。まあいいわい。で、今回問題になつとるのはそのわしらに対して出された連合からの命令^{オーダー}じゃ」

そこで、近衛門は頭を抱えたため息をついた。よほど面倒な命令を受けたのだらう。可愛そうに……。と、完璧に他人事といった風に、秘書っぽい人がもってきた紅茶をすするシシンに信じられない言葉が飛び込んできた。

「我が麻帆良にいる魔法先生……………そして魔法生徒を兵士としてこちらに送れと言われたのじゃ……………」

「ぶふあ！！はあ！？」

さすがに聞き捨てならないと紅茶を吹き出しシシンは机をたたき、立ち上がった。

「どういうこつちや！？ガキなんか戦場に出しても何の役にもたたへんぞ！？」

「それほど状況が切迫しておるといふことじゃ。帝国と連合の戦力差は歴然としておる。おそらく戦争が始まれば連合は瞬く間に窮地に立たされるじやろう。それをふせぐために、今のうちに優秀なものを兵士として徴兵し、戦力を増強しようという魂胆なのじやろう」

「……お前……その命令飲むつもりとちゃうやろな？」

「飲むしかないのだシシン。今の我々に連合に反抗して無事で済むほどの力はない」

「はあ……いつのまにこっちの魔法使いたちはそんなに弱体化したんや」

昔は八仙……とはいかなくとも、一人で軍勢を相手取るところができる大魔導師がごまんといたのに……。時代の潮流に嘆きながら、シシンは肩をすくめた。

「しかし、突っぱねざる得ない状況になったら話は別だ」

「どういうことや？」

八仙パーシェンの言葉にシシンは首をかしげ、近衛門は苦笑を浮かべる。

「連合とてわざわざ弱い兵を送ってほしいわけではない。そこで奴らは今度行われる武道会に目を付けた。そこで上位に入った魔法生徒魔法先生を連合へと送って来いと言い出したわけじゃ」

「そこで俺たちはその大会に参戦し魔法先生や魔法生徒をボコボコもしくは戦闘不能にして戦争に行けない状態にする。幸いお前は見た目十六歳だからな。ギリギリ少年の部に入れるだろう。私は成人の部に参戦し魔法先生たちをボコる」

「ええ………」

あまりに非人道的すぎる提案にシシンはドン引きである。おまけにこの話を聞く限り彼は子供をボコらなければならぬのだ。どう考えても良心がずきずきと痛むことは必至である。

「ああ……何つつか、遠慮してええ？ガキをいたぶる趣味は俺には……」

その時、シシンの首に何かが巻きつくような感触があった。さつと青ざめるシシン。暗い笑みを浮かべる八仙^{バーシェン}。

「やってくれるよな？」

「はい………」

シシンの首に巻きついたのは鋼の糸。使い方を工夫すれば鉄板すら引き裂く殺人兵器である。指針は一度八仙と戦ったことがあるのだが、この糸によって何百回も四肢を引き裂かれた経験があるので、正直この武器にはトラウマに近い恐怖感を抱いているのだ……。

「快い承諾をいただき感謝するぞシシン殿」

「お前の目は節穴かなんかないな？」

ひょうひょうと言つてのける近右衛門に、シシンは青筋を浮かべる。手元に刀があったら切り捨てているところである。

「開戦はおそらく三年後じゃ。わしらはそれまで何をしてでも生徒たちの身の安全を守らねばならない。こんな理由もよくわからん戦争にわしの大切な生徒を送り出すわけにはいかんのじゃ」

こうして、麻帆良舞踏会に嵐がやってくることが決定したのだ。

その頃、麻帆良駅では。

「おお！！ここが武道大会の会場かよ！？すっげえええええええええええ！！」

やたらとはしゃぐ赤毛の十歳程度の少年と、

「あ、こら！！そっちはエントリー会場じゃないぞ！！」

野太刀を布で覆った青年が降り立ったのだが、彼らはまだそのことを知らない。

二話

「ふはははははははははは！さあ、検索を開始しようか！？」

「完璧に人力だな……………」

「もう……………いきなり麻帆良に来说われてたから急いできたのに結局こんなことですか……………」

ここは麻帆良学園都市内部にある巨大図書館。

俗称図書館島。正式名称は近右衛門ですら忘れてしまったらしい。

そこには大量の禁書を前に爆笑をするシシンと、手伝いついでに読みたい本を探しに来た八仙^{パーシェン}、関西から強制招集をかけられたマリアがいた。

結局近右衛門の依頼を受けることになったシシン。八仙は報酬はシシン自身の命だと言いつつ張ったが、シシン自身は痛いのが嫌なだけであつて、首を切り取られただけでは別に死なないのでさすがにそれは拒否した。

しかし、彼らの襲撃によって弱体化してしまった関東魔法教会では彼に払えるような金はなかった。そこで、最近（？）シシンが魔法に関しての知識を収集しているということを知っていた八仙^{パーシェン}は妥協案としてシシンの図書館島禁書庫への出入りを認めたのだ。

シシンとしてもそれを報酬としてもらえるのだったら、金以上の価値があるのであつさりと承諾。

そして、現在に至るといわけだ。

「ここがすべての魔法に知識があるといわれる麻帆良の図書館島！
！ほんま一般生徒のための図書館にしとくんがもつたないくらの宝島やで！！」

「テンション高いですね……………シンン卿」

「そんな風と呼ばれているのだな対外的には……………そういえば
明治時代は爵位持ちだったか？」

戦争で第二次世界大戦で戦艦をたたき切ったとか、逸話には事欠かない伝説を残した男である。もつとも、軍上層部に愛想を尽かし、
当時の元帥を殺した後に失踪したのだが……………。

「無駄な人生の消費の仕方をしているよなあ……………俺たちにと
つて人生なんてあつてなきようなものだが」

「それはそれで嫌な言葉ですね……………」

マリアと八仙がそんな風は無駄話をしながら本を次々と運んでいく。

マリアは本をなでるだけで、瞬時にシンンが座る机の上へと移動させ、八仙は先端にナイフ……………というか小さなとげがついた見えないほど細い糸を使い本を移動させる。

シンンはそんな超常現象を使って運ばれてきた本をパラパラと高速でめくっていき、暗記、読破していく。

最近通信教育で習った速読法である。

不死者のイメージが崩れる現代社会の適応力である。ちなみに資格も持つており、八十七の資格と各検定ものもすべて一級になるまで極めていたりする。別に就職なんてする気もないくせに何をしているのだろうかこの男は？

まあ、それはそれとして。

今のシシンはとにかくハイテンションだ。それもそうだろう。麻帆良の図書館島は異常なまでの禁書と上級魔道書が収められていることで有名な場所である。

その全容を知る者はおらず、この世の魔術がすべておさめられているといわれるほどである。化学サイドの知識は極限まで持ち合わせているといってもいい超能力者たちにとって徹底的に足りない知識がここにはあった。

「さあて、一步前進と。魔法科学を確立するために必要なファクターが全部そろうかもしれない」

「楽観的すぎやしないか？」

「俺たち不死者は楽観的にでもならへんと生きていかれへんやろ？」

「まあ、それはそうだが……………確立できたところで公表はできないんだろ？」

メガロメセンブリア大戦と八仙が勝手によんでいる、シシンのメ

ガロメセンブリア襲撃事件はシシンの敗北という形で幕を下ろした。実際はシシンが魔法の隠匿の重要性を説かれて説得されたことによつて退散したのだが、さすがにあれほど甚大な被害を与えたシシンをただで帰すことはできず、シシンは説得されて二、三日首をさらされたのだという。

もつとも、四日後にはきれいさっぱり首が消えてしまったため、銀髪の狂侍は妖怪だった！幽霊だった！などといううわさがまことしやかに流されているようだが……………。

そんなことはともかくだ。シシンはいったん魔法科学を公表することをあきらめていたはずだ。それなのに今はその技術の確立に躍りになっている。

まさか、もういちどあれを公表するつもりなのか？

八仙がそんなことを考えいぶかしんでいると、シシンはハッ！といわんばかりのバカにしたような顔で八仙を見下した。

「なんだか知らんが……………無性に殺してやりたくなるからその顔はやめろ」

「別に公表せんでも俺ら能力者が使うに関しては魔法世界のやつらも文句言えへんやろ。せやからこれはうちの境界の部外秘技術にして、いろいろと使わせてもらっつんや。俺らの能力は魔法みたいに便利ちやうさかいなあ……………」

「ああ、そういうことか」

心配していた事態などではなく、意外とまともな答えが返ってき

それから数時間後。

高速で本を読み進め要所要所をメモしていくシシン。気分が乗ればそこに無数の魔道式と化学式を描き、方陣のような図形を描いていく。その一つ一つが光を放ちながら浮遊をしだす。

基礎科学魔法。浮遊式。シシンがエヴァンジェリンの城の中で完成させた唯一の科学魔法である。その消費力量と演算に必要な高度さから、普通に筈で飛んだほうが早いとエヴァンジェリンに言われてしまったポンコツ式である。

しかし、シシンの式は空気に宿る温度を燃料として浮かび上がっている。シシン自身が全く疲れないという利点があるのだが、そんなもの超能力者の演算能力があつてのものだとエヴァンジェリンに切り捨てられた。

まあ、ようするに、いまのところは超能力者にしか使えない代物だということだ。先ほど言った独占技術云々もこれが大きく起因していたりする。

「でつきたあああああああああ！！」

そして、突然の大声に、八仙は信じられない式が組上げられているを見た。

「それは……………なんだ」

いや、八仙はそれを見ただけで理解していた。しかし、それを信じるのができなかったのだ。あんなものをたった数時間でくみ上げるなど……………。

「空気に宿る風力ベクトルを吸収しての永久機関やな」

「魔法使いでも作り出せていないですよそれ……………」

「ただ、これを使っている間は空気の移動が完璧に止まってまうから、近くにいる生物は根こそぎ窒息してしまうという……………」

「悪質極まりないですね……………ほとんど戦略兵器ですよそれ」

シシンの解説を聞きに本棚から戻ってきたマリアの顔に冷や汗が浮かぶ。シシンが作り出す式は何気に危険だったりするのだ。目的の達成の前に使うもののほうが効果が高くない？という本末転倒な式たちの群れにマリアはため息をつく。

「これは一回使ったらあとはエネルギーなしでずっと動き続けよる

からまだ安全なほうやで！！発電電力量は秒間1・2デイグボルト
！！」

「デイグボルト？」

「既存の電力単位で表すと結構長い数字になってまうからオリジナルの電力量を作ってみたわ！！」

「東電と関電にあやまってください」

某鉄の男を思い出し、マリアは大きくため息をついた。

「まあ、かなり危険な式ではあるな……………これがあつたらメガロメセンブリアを一撃で塵に変えることができるぞ」

それほどの膨大な力が式鬼からあふれ出ているのを感じ取り、八仙は眉をしかめた。

「兵器運用する気はないんやけど……………」

「それでいい。むしろするなんて言い出したらお前おをここで惨殺する必要があつた」

「普通に暗殺でよい？」

実際に体がバラバラに刻まれた拳句、そのまま放置されてしまう自分の姿をかんがえてしまい、シシンは青い顔で自分の腕をさする。どうやら鳥肌が立ってしまったようだ。

「ふむ。きょうのところはこんなものだろう。もうかなり暗くなっ

ている」

「うえ！？ほんまや！！」

「ずいぶんとたっていたんですね」

バーシェン
八仙に促されて外を見てみると、外はもう真っ暗。燦々と星が輝いていた。それを見たシシンとマリアは慌てて自分たちが借りていた本を本棚に戻していく。そうしないと、一般生徒にばれてしまう場所に本が紛れ込んでしまう可能性があるからだ。

魔道所は元の場所に戻すこと。この図書館の鉄則である。

「それじゃ、明日の大会頼むぞシシン。寝不足で実力が出せませんでしたなんて言って予選で敗退したら……………火葬するからな？」

「冗談に聞こえへんで……………」

「今日はありがとうございました」

そういつて図書館島の入り口で二人の不死者はわかる。まさか大会に結構な強者が現れるなどと夢にも思わずに……………。
…。

三話

「ラストオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「うわあああああああああああああああー！」

シシンに容赦ない右ストレートを喰らい、障壁をつぶされあっけなくノックダウンされる魔法生徒。

どう見ても高校生のシシンが小学生の生徒を殴り飛ばしたため、周囲の観客からは多いなブーイングが飛んでくる。

「うっ………せやからこんな役目嫌やったんや……………」

ちょっと泣きそうになりながらも退場していくシシンを鼻を鳴らすことで見送りながら、八仙はポテトチップスを咀嚼した。

「流石シシン卿。一撃も喰らうことなく勝つとは……………」

「まあ、魔法生徒ならこんなもんだろっ」

観客席でその光景を見ていたマリアと八仙は試合内容に冷徹な評価を下しながらも、周囲から聞こえてくるブーイングにため息をついた。

事実を知らないとはいえ、あんまりな扱いである。あとで近右衛門に依頼報酬の上乗せを打診しておくか……………などと考えながら、八仙はマリアを促した。

「激励にでも行ってやれ。愛しいシシン君が心配だったからここに残ったんだろ？マリア」

「……………そうします」

誰にも言っていないはずなのになんでバレたんだろ？

内心驚きながらも、特に否定することなくマリアは選手控室へと走っていくのだった。

「むしろ否定しなかったほうが驚きだ……………照れ隠しぐらいはしろよ」

そして取り残された八仙ハシエンはマリアとは別の理由で度肝を抜かれていた。

「ふー」

シシンはため息をつきながら控室に設置してあるベンチに座る。
その周囲には誰一人として人はいない。

年下であろうと一切容赦しないシシンにみんな恐れをなしているのだ。

「あのクソじじい……………これ終わったら一発しばかせてもらわなあかな」

不当な評価を受け、若干傷つきながらシシンは自分のカバンからタオルを取り出そうとした。しかし……………。

「あ、あれ？ ない……………忘れてもったんかな？ 昨日いろいろあつたせいで寝ぼけとったから……………汗ベツタリかいてもうたから

体ふきたいんやけど」

「そんなことだろうと思って持ってきていますよ」

「ん？」

シシンが参ったなといわんばかりに頭をかいた時、後ろからの声とともに白いタオルが投げつけられた。

「降参せえつか？」

「なんで私がボクシングのコーチ役やらないといけないんですか？
激励に来ただけですよ」

そんなことを言いながら中に入ってくるマリアをみて、恐怖で抑
圧されていた周囲からの殺気が、息を吹き返した。

こんな美人を応援団につけやがって……。というたぐいの
殺気である。発生源は主に中学生と高校生からであったが。

「ここに参加している人は少ないですね……。高校生はシ
シン卿を含めて三人中学生が四人ですか。あとは小学生が占めてい
ますね……………」

「今回の大会は特別や。連合のアホどもが一人でも多くの兵を送れ
ってことで、年齢別に分けてそれぞれの上位10人を選出して送り
出すようにしとるいうことやな。本で俺の仕事はその上位十名をこ
とごとく襲撃、もしくは試合に出て再起不能……………とはいかん
までも、戦争中は動けんようにするのが仕事や」

「完全に悪役ですね……………」

「残虐超人並みにひどい所業やな」

「どちらかというと悪魔超人では？」

「ひどすぎひんそれは？」

「マリアにまでそんなことを言われてしまい若干ショックを受ける
シシンに、マリアはため息をついた。

「とにかく、お仕事なんですから割り切ってください。報酬は先払い
なんですからいまさら嫌だなんていったら私たちの信用にかかわ
ります」

「わかつとるわそのくらい」

その時、控室に設置されたモニターから盛大な歓声が聞こえてき
た。

「なんや？」

「ああ……………^{バーシエン}八仙さんの試合が始まったみたいです。あつちは
棄権とか行方不明が多くて試合の消化が早かったので、今が決勝戦
だそうです」

「裏で八仙が何したんかが気になるけど……………。はっ！！
どんな魔法先生かて、あいつに勝てる奴がおるわけ……………」

シシンがそう言いかけてマリアが水筒に入れて持ってきてくれた

紅茶をすすろうとした、その時！！

『雷光剣！！』

「ぶふああああああああ！！」

聞き覚えのある声とともに、閃光ほとばしり会場の一角を消し飛ばすのを見てシシンは紅茶を吹き出してしまった。

「つて、えーしゅん！？」

「何してんですかあの人は……………」

見覚えのある眼鏡侍が木刀片手に、八仙の糸による猛攻を防いでいるのを見てシシンとマリアは啞然とする。

「おいおい……………爺の差し金かいな？」

「さ、さあ。さすがに私もそのことは知りませんが……………^{パー}八仙^{シェン}さん危なくないですか？」

マリアの言葉に、シシンはしばらくじつとモニターを見ていたがしばらくして安心したようにため息をついた。

「安心せえ。あれでは八仙には勝てへんわ。二の太刀は封じとるみたいヤシ……………観客がある限りあいつは決戦奥義を使えへんしな。対人に特化した八仙の八仙糸は振りほどけへん」

「なんだよその言いぐさ。まるで詠春が負けるって言ってるみたいじゃなねえか！！」

「ん？」

そして、後ろからの声とともに突き出された杖を片手で捌き、鋭い蹴りをもって反撃するシシン。

「お！？」

攻撃を加えてきた人物は少しうれしそうな声とともに、はじかれた杖を高速で旋回。シシンの蹴りをそれで受け止めると、受け止めきれなかった衝撃を後ろの飛ぶことで逃がす。

「ほお。最近のガキは末恐ろしいな……。というかガキンチヨ。最近の外国ではテレビみとる奴を後ろから攻撃するんが挨拶の主流になつとんのかいな？」

「いや、いきなり攻撃くわえたことは謝るけどさ、ダチをバカにされたら多少おこることぐらいは許してくれよ」

やたらと活発そうな瞳。真紅の髪にいたずらっぽい笑みを浮かべた十歳前後の子供がそこに立っていた。

「ふん。ガキンチヨ……………名前はなんや？」

「ナギだ。ナギ・スプリングフィールド」

「ふーん……………あたんのは決勝戦でやな。楽しみにしてまっ
とるわ」

トーナメント表を確認して、本気で残念そうな顔をしてシシンは

そうだった。そして、マリアを伴い控室を後にする。

「あの少年……………かなりできますね。シシン卿の蹴りにあそこまで正確な対処をしてくるなんて」

「ああ……………でも悲しいことに実戦不足っぽかったなあ……………」。この大会でどこまでのびるかで決勝の出来が決まってくるやろ……………」

ようやくおもしろそうな相手を見つけられたとシシンは笑い、マリアはため息をついた。

「十歳のガキの戦力分析を真剣にやる私たちっていったいなんなんでしょうね……………」

「いづなや……………悲しくなってくるやろ」

こんなことでもしないとやっていけないほどに、今のシシンは病んでいた。

「ところで、八仙^{パーシェン}さんの試合見なくてよかったんですか？」

「あ……………」

八仙が勝ったそうです。

四話

『さあ！！麻帆良武道会、間もなく決勝戦の始まりです！！東には……………黒髪の死神！ザ・ゲドウ！死ね人間の屑！！と人気全くない残虐超人、松壊シシン選手うううううううううううう！無数のブーイングを浴びながらの登場です！！』

時は流れて……………武道会・幼年部・決勝戦！！若干目元に涙が浮かんでいる気がしなくてもないシシンがあんまりな紹介を聞きながらリングに上がる。そんな中でも気丈に顔をあげ、笑いながら立っているが、その顔がひどくもろい印象を受けるのが印象的だった。

「対する西サイドには、はつらつ少年！！赤毛の王子様！！雷光拳！！無数の二つ名と無限の人気を誇る無双の十歳、ナギ・スプリングフィールドオオオオオオオオオオ！！外道のシシンに鉄槌を！！と期待を込めた歓声とともにリングへと入場うううううううううう！！」

対するナギは、シシンとは全く違う歓声を受けながらリングへとはいってきた。その動きは粗削りながらも鋭く俊敏。達人が見たら警戒するような強者の雰囲気醸し出していた。

「あんたずいぶんと嫌われてるんだな。結構優しそうなのによ」

「いろいろと事情があるんやハゲガキ。棄権することをおすすめで。今の俺は色々タイラついとるから今までみたいに手加減できる気がいいひんしな」

「冗談！！　ようやくおれとまともに戦える人に出会ったんだ！！
俺かあんたが倒れるまで……勝負してもらっぜ！！」

バトルジャンキーじみた宣言をしていたナギの声をかき消すように、試合開始のゴングが鳴らされる。

瞬間、ナギの姿が掻き消えたかと思うと、瞬時にシシンの後ろに出現し拳をふるってくる！！

瞬動術……それも限りなく縮地に近い完成度を誇るほど鋭いものだ。

「だがそれではシシンには勝てない……」

観客席でその光景を見ていた八仙がそうつぶやいた。

「それはいったい何で？」

先の試合で八仙に敗北してしまった詠春は折れた右手をギプスと釣り布で支えながらの観戦だ。

「瞬動術程度ではシシン卿の目からは逃れることはできないの。逃げようと思うなら雷速の速さが必要ね」

マリアがそういった瞬間！！　後ろに出現したネギの顎を、お辞儀をするように前に上体を倒したシシンがはなっ蹴りあげが容赦なくうちぬいた！！

その後、バク転して距離をとるシシンに再びブーイング。ナギは何とか体制を立て直し、脚から見事に着地するが、今ので脳を揺ら

されたのか多少足元がふらついている。

「ふ……ブラフだな」

「ブラフ？」

他の観客のほとんどが心配する中、唯一八仙だけがそう言つてのんびりとポテチを食べていた。

「あのガキの周りにはいくつもの障壁が貼つてある。本来拳打を重視するシシンの蹴りは威力が限りなく弱い。そんな蹴りでは、まともにも決まっただとところでダメージたかが知れている。それなのにあいつがダメージを受けているようにふるまっているのは、シシンに好機と思わせて攻め入るチャンスを与えているのだろう。おそらく狙いはカウンターだろうが……」

右手でポテチの袋を丸めながら、八仙は鉄面皮は一切動かさず、しげな声を上げるといふ高等テクを披露する。

「さあて……あのシシンにカウンターなんてあてられるかな？」

スツと、シシンが瞬動に入るのを見てナギは不敵な笑みを浮かべる。

「この勝負もらたぜえ ええええええええええ！！」

そういいながら、ナギは無詠唱で魔法の射手を展開！！ その

数、実に199矢！！

年齢に似合わぬ破格の数に、観戦に来ていた裏の住人達はどよめきの声を上げる。

「なるほど……規格外だ……。だが、その程度ではな」

それを見た^{バーシエン}八仙は感嘆の声を上げながらも、いまだにシシンの勝利を信じている。詠春はそんな彼の姿を見て、首をかしげた。

確かに彼らは不老不死という規格外の力を持っている。しかし、シシンの不老不死は弱点が無数に散在する使い勝手が悪いものだ。それだけのあいてに、どうしてこれほどの信用ができるのだろうか？

この時詠春は見たことがなかったのだ、シシンの本気というものを。

瞬間……。ナギがまるでコマのように空中を回転しながら場外まで吹き飛び、ポケットに手を入れたシシンが床を削りながら静止し、競技場ギリギリのところに出現した。

「……………は？」「……………」

その場にいた裏の住人や、詠春、そして試合をしていたナギさえもいったい何が起こったのかわからなかっただろう。

文字通り、瞬間間に、一瞬に…松壊シシンは、ネギがバカ魔力で張っていた障壁を貫き、場外へ吹き飛ばし、起き上がれないほどのダメージを与えたのだ。

「ふん。やつぱしこの程度かいな。まあしゃないわ少年。年季が違いすぎるんやから。よー頑張ったとは思っけど、もう立ち上がることはできひんやろ？ おとなしゅーねとくんやで」

平然とそんなことを言いながらさっさと帰ろうとするシシンに、観客たちはようやく我を取り戻し声を出し始めた。

「い、いまのは……何が起きたのでしょうか？」

先ほどまでハイテンションで解説をしていたナレーターでさえも困惑気味な声を出すのを見て、八仙はくちもとにだけ苦笑を浮かべた。

「いまのは？」

こちらで我を取り戻した詠春が説明を求めてくる。八仙としては説明してやる必要はなかったのだが、久しぶりにシシンの本気が見

れたのでそこそこ機嫌のいい彼は、いつもより少し饒舌になりながら説明を開始した。

「松壊シシンの切り札。自在瞬動……本人は《神行》と呼んでいるがな。瞬動術とは足にチャージした気や魔力を爆発させることによつて直進する速度を上げるものだが、あいつの《神行》は、《特殊な歩法術》によつて発動されている。それによつて奴の瞬動は自由自在に曲がる。シュンドウの2.5倍というでたらめな速度を保ちつつな」

「さらに長年それを使っていたシシンの体は、その状態に適応している。つまり、そんな速度で動きながらも周囲の状況を普段と同じように確認できる感覚器官が備わっているということだ。先ほど少年の瞬動を見切ったのもこれが起因している。そのため奴は予測しやすい直線的な攻撃をする必要はなく、常に相手の不意を打てるポイントから攻撃を仕掛けることができる」

「最後にあいつは二百年ほど前に、《特殊な歩法術》を更に進化させて、構えを取らずに全力の拳を打ち込むすべを覚えた。つまり、いちいち減速してこぶしを叩き込む必要がなくなったのだ。だから攻撃時にできる決定的な隙も技後硬直もない。つまり、一度も神行を解く必要なく相手を好きなようにタコなぐりにできるというわけだ」

「……でたらめすぎる」

瞬動術を使いこなしているとかそれ以前の問題である。生き物としての規格が違いすぎる。さすがに《吸血鬼真祖》や《龍樹》に比べるとかなり見劣りするが、対人における戦闘では十二分に脅威となりうる身体性能である。

「さらに言うと奴は、ほとんどの人間が攻撃時に殺してしまう瞬動のエネルギーを完全に拳に乘せることができる。その威力は戦車の砲撃と同じ威力だ。そんなものにタコなぐりにされたんだ。障壁があつただろうから死んではいないだろうが、おそらく立つことは……」

その時、八仙は目を見開き立ち上がった!!

「……………バカな!!」

呆然としたままそうつぶやく八仙を見て、詠春も八仙が見ている方向を見してみる。

「な!!」

そこには、口から鮮血を流しながらも、不敵に笑いながら水面に立つナギがいた。

「おいこら!!」

「な、なんやと!？」

さすがにこれには驚いたシシンに向かってナギは瞬動を発動!!
呆然としていたシシンの目の前に現れ、魔法の射手を乗せたこぶしを叩き込んだ!!

「ぐっ!!」

さすがにこれを喰らうとやばいことに気づいたのか、シシンは腰

に下げたまま、大会では一度も使わなかった木刀に手かけこの拳を迎撃する。

そして、見事にへし折れたそれを捨て後方に跳躍。こちらは《特殊な歩法術》をつかつて、水面に着地し、スケートのようにしばらく後ろに滑ってから壁に当たり静止した。

「俺が負けたって？バカいってんじゃない！勝負はこれからだ！」

口元に残った血をうっとおしそくに拭いながら宣言してくるナギを、シンはしばらく呆然と見つめた後……

[illegible]

突如笑い始めた。

「ど、どうしたんですか？ シシンさん！？」

「あのバカ！！木刀を使う気か！！」

突如笑い出したシシンを気味が悪そうに見つめる詠春とマリアをしり目に、八仙は怒声を上げた。

「天速流……奥義《技無》」

シシンがそうつぶやくのと同時に、シシンの姿はその場から掻き消え、

「!？」

一瞬のうちに、ナギの首元に木刀を突きつけていた。

「正式な名乗りがまだやったな。俺の名前は松壊シシン。関西守護職兼超能力者協会の長をやらせてもらっとるもんや」

凶悪な笑みを浮かべ、そういうシシン。その視線の先には、自分の木刀による一撃を、長大な杖で受け止めた赤毛の少年が立っている。

「ナギ・スプリングフィールド!! 魔法学校を中退しちゃったが、将来は最強の魔法使いになる男だ!!」

同じく凶悪な笑みを浮かべるナギは、10歳とは思えない傲然とした態度でそう言い放った。

「はっ!! ええ感じの大言壮語やで小僧!! 俺はお前みたいなあほが大好きや!! さあて、さっきは失礼なことしてもうたな。こっからは全力で相手させてもらおか!!」

その言葉とともに、シシンの姿が消えナギの姿も消える!!

そして、一足先に出現してしまったナギに向かって見えない木刀の一撃が襲いかかる!! しかし、ナギは今度もきちんと反応し、魔力を流した杖をもってそれを迎撃する!!

「同じ手は通じねええええええええええ!!」

ナギのその宣言と同時に振るわれた杖は、何者にも見えないほど

の速度で動いているはずのシシンの体をとらえ吹き飛ばす！！！！

「はははははははははははははははは！！　ホンマおもしろいナギ！！　こんな爽快な喧嘩は日清戦争で八仙とやり合った時以来や！！！」

そして笑いながら出現したシンが再び消失したのを皮切りに、
彼らは再び激しくぶつかり合う！！

こうして、麻帆良の歴史に残る伝説の試合が幕を開けるのだった。

お知らせ

この小説やめます!!

とかではないのでご安心してください。

ぶっちゃけ調子に乗って小説家書きすぎました。

この小説の終わるめどが全く立たないのでいったん休止し、終わりまでのストーリーがしっかりとイメージできている二つの作品を一気に片づけたいと思います。

そのため、今日から大幅な更新休止をすることに理めました。

できるだけ今年中には終わらせるつもりなので、気長に待っていただけると嬉しいです。

なお、投稿を再開するときはこのメッセージは自動的に消滅します。

再開をお楽しみにー

またまたお知らせ^^；

再び修正を行いました。

何度も何度もすいません。

1、シシンのスキルを減らしました。ライバルを名乗っている割に、10歳のナギに対して実力開きすぎでは？ という考えのもとです。彼のスキルは話が進むたびに増やしていく方式にします。

2、というわけで《ソニックブーム》は使えません。あしからず^^；

文字数が足りないので次回予告？

ぶつかり合う雷と木刀。

響きあう楽しそうな笑い声。

麻帆良での激闘はさらに苛烈さをますが、

やがて、二人の饗宴は終幕を迎える。

本格的な更新はまだまだ先になりそうです。

申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1584t/>

ライバルは超能力者？

2011年11月13日19時33分発行